

## 47 九華筆「扁鵲倉公列伝」について

宮川 浩也

## 一、足利学校との関係

足利学校は室町時代初期に下野国足利庄に設立された漢学研究施設である。その第二世席主の天矣には田代三喜・谷野一栢が学び、第六世席主の文伯には曲直瀬道三が学んだとされている。

本件は第七世席主の九華（玉岡瑞璣。一五〇〇～一五七八）が書写した『史記』第一〇五巻の「扁鵲倉公列伝」である。これは「扁鵲倉公列伝」単独に書写したものであつて、『史記』全体を書写した、その一部ではない。川瀬一馬は次のようにいう。「学校においては医書の講ぜられることもあつたと伝えられているけれども、講義に用いた医書は他に残存していないのである。然るに、本書は漢土医家の祖たる扁鵲倉公の伝であるから、いはば医書

講学の立場から存在する一本であつて、一見史記列伝の零本の如き本書は、実は学校講学の資料として極めて注意すべき伝本と言ふべきであろう」（『足利学校の研究』講談社、昭和四十九）。医書講学を証する史料としては、国立公文書館内閣文庫所蔵の周日本『素問』に、「此ノ一帖ハ足利ニテ講義ノ時ニ此ノ如キナルヲ書置クナリ」と『素問』が講ぜられた旨の識語がある。

## 二、底本について

底本は、元・中統本『史記』である。これは『史記素隠』と『史記集解』の二注を合刻したもので、桃源瑞仙（一四三〇～一四八九）が使用したとみなされているテキストである。足利学校には『史記桃源抄』も存し、桃源との関わりが深いものと考えられる。

欄外には『史記正義』の書入れが見られる。元・彭寅翁本『史記』（三注本）から移抄したものと考えられる。南化本（国立歴史民俗博物館所蔵）に書入れられた正義佚文は本件には見えない。

## 三、訓点について

本件には、主に第一葉の表裏に、経文と注文に訓点が

施されている。南化本の梅室の識語によれば、扁鵲倉公列伝には公的な訓点が施されていなかったようである。

しかし、南化本には訓点が生かされている。つまり、梅室と旧蔵者の月舟寿桂（一四六〇～一五三三）の間に訓点が生かされたものと考えられる。桃源の『史記抄』にも、本文に訓点が生かされているのが散見する。しかし、本文には二家の注文にも訓点が生かされているのである。果して、九華自らが訓点を生かしたのか疑問の残るところである。

当研究室が所蔵する、慶長古活字本「扁鵲倉公列伝」には、経文と注文とに訓点が生かされている。まだ、詳細な比較に及んでいないが、きわめて良く似た訓点である。

以上、本件をめぐって、田代三喜から曲直瀬道三に関わり、さらに桃源瑞仙、月舟寿桂及んだ。室町時代の医学史を研究する上で、欠くべからざる一本であり、『史記』研究史においても貴重な史料である。訓点を解釈の一部ととらえるなら、「扁鵲倉公列伝」の早期の解釈として重要な位置を占める。

（北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部）